

受験生・歌よみ必携

【古文単語千五百】

マ ス タ リ ン グ

Mastering

ウ エ ポ ン

Weapon

【weapon】武器・得物・対抗手段

...他者がそれを手にした時、丸腰の者に勝ち目なし。勝ちたくば、自ら求め修むべし。

from 古歌・古語・古文の総合サイト 『扶桑』(ふさう)

<http://fusau.com>

authored by 之人冗悟(のと・じゃうご:Jaugo Noto)

MW02

【古文単語千五百】

マ ス タ リ ン グ

Mastering

ウ エ ポ ン

Weapon

(MW02)

by 之人冗悟 (のと・じゃうご: *Jaugo Noto*)

from 古歌・古語・古文の総合サイト 『扶桑』(ふさう)

<http://fusau.com>

わかたねは

こするおもひも

せんなくて

こひやくちなむ

ちりもえもせて

分かたねば 期する想ひも 詮無くて 恋や朽ちなむ 散りも得もせて

Thoughts burning inside

Fostered unshared alone in vain

Love unknown ungained may wane

Without words, no worthy rewards

…人の思いは伝え合ってナンボ、言わぬ想いは思わぬに似たり。

言葉がなけりや、恋も人生も始まらない。

言わぬまま、得られもせぬまま、風化して、思い出の中でだけ戯^{たわむれ}っていたい？

そんな生き方、したくないなら（恋に、人生に）踏み出す前に、言葉に磨きをかけるべし：

受験生・歌よみ必携 『古文単語 千五百 Mastering Weapon』

《古文単語千五百》マスタリング・ウェポン 内容紹介

■〈収録語数・範囲とその選別基準〉

本書には、日本の大学入試古文問題の主要な対象となる平安時代の**文物の読解**に大いに役立つ古語・連語類を、全部で1500語収録してある。

本書収録の1500の古語は、以下の三段階を経て厳選されている：

- (1) 大学入試に際し受験生が古語語彙構築の源典とされる市販の古文単語集の収録語を網羅的に調査し、任意の古語が収録されている市販古文単語集の多寡を基準にして(市販単語集の全部に収録されている語は重要度高し／一冊に載ってるだけなら重要度低し、という具合に)、重要古語の等級〈A〉・〈B〉・〈C〉を(暫定的に)割り出した。
- (2) 高校生を対象とする学習古語中辞典(複数冊)の収録語を一語残らず全て吟味し、当該辞書の編者が重要語として特筆する語句と、特筆されていなくとも各種の観点から重要語扱いが妥当と思われる古語を拾い出し、前述の市販単語集収録頻度から暫定的に割り出した古語重要度等級〈A〉・〈B〉・〈C〉の更なる洗練を図った。
- (3) 過去の大学入試で出題された古文問題(延べ1300年度分以上)の原文を筆者自身が実際に(機械任せの“全自動コンピュータ分析”ではなく)読み解き、平安時代の文物に頻出する古語・入試古文問題で狙われ易い古語の水準を入念に(大学入試古文問題出題者の視点で)再検討し、件の重要古語等級〈A〉・〈B〉・〈C〉を、最終的に1500語へと確定した。

…かくて、本書の採用する古語重要度等級〈A〉・〈B〉・〈C〉が誕生した：

〈A〉どんな市販古文単語集でも外すわけに行かぬ“有無を言わさぬ最重要古語”
= 単語400／連語類50

…古文初学者(+入試直前でなお古語未習得の受験生)は、まずこれだけは覚えるべし

〈B〉収録語数の制約がなければ“古文指導者として単語集に入れたい中堅語”
= 単語450／連語類50

…古典文法も基礎的語彙も習得した後(+難関入試に挑む者)は、これをも覚えるべし

〈C〉入試云々よりむしろ“古典常識・古文書解読力の向上に役立つ最上級古語”
= 単語500／連語類50

…古文入試力の死角をなくしたい・古文の塾講師や家庭教師として恥ずかしくない実力を身に付けたい・優雅なる文芸としての古文・和歌の嗜みが欲しい、なら、ここまで覚えるべし

■〈収録語の配置順〉

本書では、1500に上る膨大な古語群を**理的・効率的・感覚的に理解・暗記し易くするための工夫**として、**語源・語形・意味等の面から関連の深い古語を並べて一堂に記す“意味集団別配置”**(五十音順or“試験に出る順”に非ず)を採用した。

全収録語1500語を、同類古語群として126種の意味集団に分け、各意味集団の始まりには“●当該意味集団の簡単な紹介文”を付けた。

各意味集団内に於ける語句の配列もまた、**五十音順であるとか(上述の)古語重要度等級〈A〉・〈B〉・〈C〉順だとかの安易な機械的配置にはせず**、同一意味集団内の他の語句との**関連性が理解し易く暗記に好適な合理的配列**を心掛けた。

■〈収録語に関する情報〉

全1500語の収録語には、以下の情報を記してある:

(1)―収録語番号―〈古語重要度等級A・B・C〉かな読み【漢字読み】

…各古語見出語の冒頭部には以下の情報を記載した:

*全1500語中の何番目にあたる収録語か?

*重要度は〈A〉最重要・〈B〉中堅・〈C〉最上級 のどの等級か?

*「ひらがな」に加えて、どんな【漢字】で表記される場合があり得るか?

(2)〔品詞〕

見出語の〔品詞〕は、同一品詞に属する最初の語義の〈語義解説〉直前に略号で記した。略号の形態は、大方の辞書・単語集のそれに倣い、例えば「他動詞でタ行下二段活用する語」=〔他タ下二〕/「助動詞でラ行変格活用に属する語」=〔助動ラ変型〕/「形容詞のク活用」=〔形ク〕/「形容動詞ナリ活用」=〔形動ナリ〕/「接続詞」=〔接続〕/「接続助詞」=〔接助〕/「接尾語」=〔接尾〕のように記した。

〔連語〕の場合、それを構成する成文までも、同一連語に属する最初の語義の〈語義解説〉直前に記した。なお、連語の中でも構成成分相互の**関連性が強く**、“単語”や“一品詞”に近い扱いで一まとめにして覚えるべきであると筆者が判断した語は、特に〔**接続語**〕と記して、単なる〔連語〕とは**区別した**。

(3)《語源考察》

各見出語の**個別的語義の解説**に先立って、当該見出語にまつわる**語源・歴史・文化的背景事情**を簡潔に記して、その**全体的な語感**が思い浮かぶようにした。

(4)〈語義解説〉

各古語の語義は、“その古語を現代日本語に訳したらどうなるか”をダラダラ羅列する形で漫然と示すのではなく、〈その古語の表わす意味を論理的に定義するとどうなるか〉を、当該見出語の各語義ごとに細かく分析する形で記載した。(…英英辞典—an English-to-English dictionary—や百科辞典のみっちりと濃密な解説文のイメージである)

(5) 厳選訳語

各古語の訳語は、当該見出語の各語義の〈語義解説〉直後にその古語の意味を現代日本語で忠実に伝えるのに最も妥当と思われる一語のみを厳選し記した(これは、受験生の暗記の労苦を最低限に絞り込むための割り切りである)。但し、〈語義解説〉中に複数の論理的定義が並立する場合は、各論理的定義一つごとに一語ずつ複数の訳語を配した。

※語義の収録範囲(割愛対象)について

大学入試で問題となる古語の語義が実質的に中古(≒平安時代)に限定される現実に鑑み、この時代を大きく外れ、語義も現代語からの類推で片が付くことの多い後代の語(近世語)は(《語源考察》で言及されている場合等を例外として)全て割愛した。但し、近世語でも、それが文芸語として重要であるとか、その他の観点から覚えておくべき重要語であると判断される場合は、特例として記載した。

近世以前の語義については、本書には一切割愛せずに記載してある。中世(大まかに言えば鎌倉～室町時代)の語義や上代(≒奈良時代)の語義も(時代背景の注記を添えて)残らず記してある。即ち、本書は“中古日本の古語オールスター列伝”として「辞書的に」使用可能な古文単語集、ということになる。

※漢字表記と振り仮名(ルビ)について

本書では、漢字表記が妥当な箇所では妥協なく漢字書きを貫いた。漢字の表意性(見た目から意味が浮かび易い便利な図柄としての特性)を、漢字排除の仮名書き和語が偉そうに罷り通る現代日本にあって漢字をロクに知らぬ読者連に再認識させる意を込めて、である。低きに流れる時代の潮流に抗う一表現者の意思表示の一環として、表現・用語ともなるべく格調高いもの(現代の日常会話にはあまり登場せぬもの)を意識的に多用した…ので、識字能力の高くない読者のために、難読語や誤読可能性の高い漢字には、重複を厭わず振り仮名(ルビ)を賑やかなまでに割り振った。(横書きなのは電子媒体上の都合で、他意はない)

■〈巻末索引〉

本書の巻末に用意した索引には、1500の収録語全てを、古語重要度等級〈A〉(450語)／〈B〉(500語)／〈C〉(550語)の三集団に分割した上で、各等級別に、その重要度集団に属する古語を五十音順(本編と異なり、意味集団別ではない)にまとめて配置してある。(総数46ページ! …ただの索引とは訳が違う)

この索引には、各見出語の本書内に於ける—収録語番号—を付記してある:のみならず、見出語の“ひらがな読み【漢字読み】[品詞]厳選訳語”まで残らず記載してある。即ち、本書巻末の索引はそれだけで一種の“〈A〉〈B〉〈C〉重要度別1500語古文単語集(あいうえお順インデックス)”を形成している、ということである。

本編で語源や各語義の論理的解説を消化吸收した後で巻末索引を使って語義の理解度を確認するもよし、巻末索引にある一語の訳語から各古語の〈語義解説〉を逆に思い浮かべる訓練を通して自らの論理的言語能力を錬磨するもよし、古文の授業や独習の際に参照して文章中に登場する古語の意味の確認に用いてもよし、試験日までの切迫した時間の中で最小限の語彙を手取り早く身に付けるために巻末索引の見出語+訳語のみ(かつ、〈A〉のみとか、〈C〉は排除とか)を丸暗記する等の駆け込みでの活用もまたよし…使い道は様々、すべて読者の工夫次第である。

単語に“例文”が付属せぬことに不満な読者は、千五百もの単語群の“例文集”がいかに分厚くなるか想像してみしてほしい:多くの単語集の収録語数が四～五百語止まりであることの“商業的(≡非学術的)”理由がわかる筈である…それでも妥協を許さぬ読者は、同様に妥協と怯懦を嫌う作者の手によって「千五百全見出語」に加え「助動詞37全用例+助詞77全用例+古典文法全重要語法」までふんだんに織り込まれた平安調擬古文歌物語集 22編『ふさうがたり(Fusau Tales)扶桑語り』(CW00)を(繰り返し!)読むことで、語学的卓越と共に文芸的愉悅をも味わわれるが宜しかろう…が、大方の受験生にとっては、本書+『古文・和歌MasteringWeapon』(MW01)の併用学習のみで十分:両書で力を付けて後に挑む入試古文の過去問は、正しいやり方で戦って得る勝利の美味を、諸君に堪能させてくれることであろう。

…能書きはこのへんでよろしかろう。以下、本編:
実りある活用&輝ける成果を、期待する。

2011(平成二十三年) 夏

作者 之人冗悟(のと・じゃうご: *Noto Jaugo*)

…『古文単語千五百 Mastering Weapon』 意味集団別語群 一覧…

- 1)1●五十音からいっても人の情からも、「あ・い」がなければ始まらない、ということ、まずは「愛・情」関連の古語から
- 2)23●「愛着」が生じたら、次なる必然の過程は、「結合・結婚・縁故」等々、人と人とを結び付ける古語の数々
- 3)54●愛着と結合でこの世は回る、ってことで、次は「よ」にまつわる古語あれこれ
- 4)62●「世」つながりで今度は「夜」
- 5)65●夜が明ければ次は「朝」
- 6)70●明ければ暮れる、「明」の後には「暗」が世の常、人の常
- 7)76●電灯のない古典時代の夜を照らす唯一の明かり「月」と、その明度に絡めて「鮮明／不鮮明」系の古語をひとしきり
- 8)95●日も月も昇ってはまた沈み、世の勢いもまた上り下りを繰り返す、ということで次は「上・下」にまつわる古語の数々
- 9)106●おろす勢いで「髪」まで剃り落としちゃったついでに、「かみ」つながりで人の世の序列の「上」にまつわる古語のあれこれ
- 10)152●次は、上流階層に連なる人々の感覚で言う「人並み以上」を表わす古語の数々
- 11)163●上流階層気取る連中のあるところ、必ずや構造的に作り出される「下」に連なる人・物の名や様態の数々
- 12)184●続いては、平安時代人の高らかに誇らしげな息づかいの宿る「高貴」なる古語のあれこれ
- 13)195●次は、「身の程」にまつわる古語あれこれ
- 14)202●「上」の「下」のの大騒ぎの後には、どんぐりの背比べ得意気に繰り返す人々の「空」なる心の虚しさ表わす古語にて、お口直しをどうぞ
- 15)212●やはり人間「実直」が一番
- 16)216●真面目ばっかじゃ息が詰まるから、こころで一つ「遊び」・「戯れ」系いきましょー
- 17)231●「遊び」も過ぎれば「飽き」がきて、次に来るのは「倦怠」系古語の数々
- 18)240●お次は、心「浮き浮き」楽しい古語というか、注意力「うかうか」馬鹿っぽいやつらというか、そんな連中をひとくさり
- 19)248●「軽薄」系のお口直しはやはり「由緒」ある古語で
- 20)253●「由」つながりで「よし」いってみよう
- 21)263●良いのの次は当然「悪い」のを
- 22)266●「善し・悪し」論ずる人の思惑など知らんぷりして突き進む世や人を前にしての感情、「残念」系の古語あれこれ

- 23)283●次は、良いの悪いの残念だのと言ってるだけじゃ生きられぬ、とばかり
ガッポガッポと「わがものにする」たくましき経済系古語の数々
- 24)296●自分で「稼ぐ」の台頭は鎌倉期以降; 平安朝宮人意識では、貴人が「与ふ」、
臣下が「受く」
- 25)304●平安時代の賜わり物の中核を成した「衣裳」の呼称あれこれ
- 26)314●授与のやりとりあるところ、意識するのは「実入りの多寡」や「やりがいの
有無」
- 27)329●「かひなし」に絡めて、古文世界で雲霞の如く乱発された「何を言っても
結局むなしい」なる表現放棄の言い回しを概観
- 28)333●文筆者の自殺的表現放棄表現「も疎かなり」乱舞のその後は、やはり
「愚か」のオンパレードがよろしいようで
- 29)343●「愚か」と言われぬためにはまず「知る」が一番の特効薬
- 30)348●英語でも申します: To know is one thing, to do is another. 「しる」ば
かりでは無益につき、次は「なす」系古語をどうぞ
- 31)360●do の後は be、というわけで、次は「あり」系古語
- 32)378●「あり」と似つつも、尊敬・謙譲絡みでややこしい「をり」・「はべり」・
「いまそかり」等々の存在系古語の数々
- 33)391●ここで、古典時代の貴人独特の行動様式「他者を使って事を為す」体の
敬語表現をあれこれと
- 34)407●「存在」系に前後して、次は「誕生」・「成長」系古語をひとしきり
- 35)416●「生」の後、必ず来るのはやっぱり「死」
- 36)439●次は、「死」には至らぬものながら、どこか寂しい「別離」の古語たち
- 37)446●「行く」も「別れ」も、その先には必ず「方向」・「場所」あり、ということで、
次は空間位置(place)系の古語
- 38)459●続いては、「場所」を表わす指示代名詞等々
- 39)470●次は、具体的な「建物」・「調度品」類を表わす古語
- 40)478●「場所」の最後は、大きく出て「国土」系の古語をば
- 41)482●「場所(space)」が一段落したら、次なる主題は当然「時間(time)」; まずは
「過去」にまつわる古語の数々
- 42)491●次なるは、時の流れて行き着く「末」の古語群
- 43)501●「元」と「末」とに挟まれた「今」に属する古語のほか、「未だ」来たらぬ未然
系、「既に」終わった已然系の語についてもここで
- 44)508●「過去／現在／未来」の悠久の時の次は、日々の暮らしの中で意識され
る時間的区切りの古語あれこれ
- 45)525●次なる時間系語は、事態の展開にまつわる「早い/遅い」系古語あれこれ

- 46)547●次なる古語は「経年」系;過ぎた時間が長ければ、いろんな事が起こるもの
- 47)557●次なる時間系古語は、特定行為と結び付いた「場合・場面・状況・展開」系
- 48)577●次なるは、時の束縛^{そくばく}を飛び越えて「現在」・「未来」・「過去」にまたがる
超時系概念を表わす不思議な古語たち
- 49)585●時間系古語の最後は、「期間」系、字面に似合わぬ語義多し
- 50)588●「時」系古語の長旅を終えたところで、軽い「健康」チェックときましようか
- 51)590●「すすく」の次は「なよなよ」:「病気・心痛・不健康」系古語の多さは、
医療未発達^{いりょうみはつたう}の時代背景^{じだいはいけい}の為せる業
- 52)604●ただ辛い^{つら}ばかりの「苦痛」系の次は、痛いほど・身も痩^やせるほど何かに強く感じる思いを表わす乙^{おつ}な古語で心をお癒しあれ
- 53)618●今度は、程度が過ぎればこれまた「痛し」という発想の、エスカレート系古語あれこれ
- 54)625●「相手の痛みを感じること＝相手をいたわる気持ち」の図式の最も自然な対象となるのは「子供」、その様態を表わす古語あれこれ
- 55)631●いたいけな「子供」の次は、「大人」の様態・行動にまつわる古語あれこれ
- 56)639●これよりしばし、「子供」に「大人」に「男」に「女」、人間の各種の属性に応じて用意された呼び名の数々を御紹介
- 57)664●「女」、とくればその性質は「柔和」・「美麗」、そしてその特性がもたらす他者からの「愛顧」系の古語あれこれ
- 58)674●次なる語群は、「美」・「愛顧」と紙一重^{あいちゆう}のところで成立する聖なるものへの「畏敬」・「慎み」の念を表わす古語あれこれ
- 59)692●境界線は微妙ながら、ここから先は、聖なるものへの「畏敬」より、あまりの凄^{すご}さへの「恐怖」・「嫌悪」が勝った感のある古語群
- 60)709●強烈なるものどもの様態の後には、「驚き」の声に由来する感動詞の類
- 61)714●今度は、様態(英語で言うところの how)にまつわる古語の大海原へ;最初の獲物は「いか」
- 62)724●とにかく膨大な様態系古語の海産物は、細切れで料理しましょ:「いか」の次は「とかく」系
- 63)732●様態系の大海原で、「いか」と並ぶ二大勢力は「しか」・「さ」;読み方変われど筆記は同じ「然」にまつわる古語の小宇宙へ、いざ
- 64)772●「さ」・「しか」の次は「そ」・「こ」に関わる指示代名詞系と「分量」にまつわる古語を少々
- 65)779●次は、計数的な「多数」を表わす古語を少々
- 66)783●「数量(how much?how many?)」の次は「人物(who?)」系古語の数々
- 67)794●次なるは「なんで?(why?)」系古語のラインナップ

- 68)802●「なんで？」ときたら、次は当然「質問・探求」系の動詞・形容詞あれこれ
- 69)811●今度は、「言ふ」にまつわる古語の数々
- 70)817●次は、何ともややこしい「言ふ」にまつわる尊敬・謙譲表現あれこれ
- 71)825●「発言」あれば当然「返答」あり
- 72)831●次は、「発言」の行為ではなくその内容に言及する古語のあれこれ
- 73)840●次は、「発言・表現」という行為そのものを云々する特殊な古語あれこれ
- 74)849●お次は、「発言」や「行動」を促す古語を少々
- 75)853●今度は、相手からの働きかけに素直に応じる「応諾」系古語群
- 76)857●お次は、他者の「発言・行動」に対して「さあどうぞでしょ」・「おいおい」と返したり「(無言)」だったりの否定的反応の古語たち
- 77)877●次は、まっすぐ肯定的に受け入れられぬものに対する「斜に構えてねじ曲がり」系や「回避」系の意味を持つ古語
- 78)890●「発言・行動」を巡る YES・NO の綱引き古語群が一段落ついたところで、お次は「発声(または、騒音)」系古語群の御紹介
- 79)902●次なるは、「雑音」系の中でも特に人の心に訴える「泣き」の表現あれこれ
- 80)915●聞こえる「音」の中でも人の社会的感性に最も敏感に訴える「世評」系の古語をば
- 81)926●「音」の次は、人間のみが用いる意味ある音としての「言葉」にまつわる古語をいくつか
- 82)931●古典時代初期には不可分の存在とみなされていた「言」と「事」、更にややこしい「異」を含めた「こと」にまつわる古語のあれこれ
- 83)953●次は、古典時代の感性では「事」と類似しつつ微妙に異なる「物」にまつわる古語あれこれ
- 84)960●現代のように目に見えて即物的なばかりではない古典時代の「物」の雰囲気伝える摩訶不思議な古語を少々
- 85)963●「化け物」まで出てきちゃったついでに、科学的を自称する現代人には縁の薄い古語への注意を促しておきましょうか
- 86)977●摩訶不思議な「もの」の世界はこころで終わり;「行く」・「来る」・「走る」と現実世界を躍動する古語の世界に目を転じましょう
- 87)1000●「行」ったり「来」たりその後は、誰しもすることはただ「寝る」だけ;但し、古文の中では「ただの眠り」か男女の「共寝」かに要注意
- 88)1007●艶っぽい「寝」が出たところで、今度は「色」にまつわる古語あれこれ
- 89)1015●「色」は何も恋愛にばかり絡む語に非ず、ということで、次は「場の空気を読む」系古語あれこれ
- 90)1022●「気配を見る」系古語の次は、より一般的な「見る」のあれこれ

- 91)1033●面倒を「見る」が出たところで、心理的に傾斜してその相手を見る「味方」及びその逆の「敵方」に関する古語をちらほら
- 92)1040●「敵・味方」入り乱れて争った後は、他者との相対的な「優劣・比較」にまつわる古語あれこれ
- 93)1066●次は、相対的な価値判断と現に身を置く状況・待遇との隔たりから生じる不調和感を表わす古語を少々
- 94)1069●他者との「相対比較」の次は、想定される「100%完璧」に照らしての「優劣・美醜」に関する古語を少々
- 95)1073●「美・醜」が出たら、お次はやはり「外形」の様態に関する古語のあれこれ
- 96)1078●「外形」の次は、やや抽象的なものをも含む様態の「様」にまつわる古語あれこれ
- 97)1083●次は、人の外面的様態の中で最も注目を引く部位たる「面」にまつわる古語あれこれ
- 98)1094●外形的様態の最後は、「手」・「指」、ついでに「肉」まで含めた大売り出し
- 99)1104●生々しい肉体の部位あれこれの後には、実体そのものではなく、その実体が「現実に存在すること」に重きを置く古語あれこれ
- 100)1109●次は、「事実・実際」系の古語をば
- 101)1114●連綿と続く「現実」に疲れた時、人が逃げ込む先は「夢」・「魂」そして「心」
- 102)1135●「心」は、他者に見せる「面(おもて)」とは裏腹な思いを宿すが故に「うら」とも読む;そんな「うら」の世界の古語あれこれ
- 103)1140●「心(うら)」に展開する思いとしてはやはりこれが主役、ということで、次なる主題は「怨・恨・嘆・憎」
- 104)1149●「心(うら)」の世界の否定的古語オンパレード、次なる役者群は「しんどい」系
- 105)1158●「しんどい」ことばかり続けば、いつまでも「心(うら)」に秘めてはおけません;ということで次なる語群は「あんたが悪いっ！」系
- 106)1165●「心(うら)」に溜まった嫌なもの、積もり積もって次なる古語は「やめて! かんべんして! もういや!」系
- 107)1174●嫌だ、嫌いだ、と敬遠する古語ばかり続いた後は、「積極的行動」系の古語で巻き直し
- 108)1196●積極的な行動様態を表わす副詞はしばしば「否定の強調語」として用いられる、という例をしばし
- 109)1207●「積極的行動」古語群、次なるは、経済・経営学部の学生サンが喜びそうな「企画・運営」系をあれこれ
- 110)1232●次は実務的な事態運営に必要な不可欠な「選別・裁断」のキツパリ系古語

- 111)1238●「選別・裁断」の果てに待つは、「完遂」か、はたまた「放棄」か
- 112)1242●次なるは、「0」か「1」かの二進法で万事片付ける電算処理ならぬ人の世の営みにはこれまた付き物の「迷い」系古語あれこれ
- 113)1246●お次は、「迷い」あれども付けねばならぬ事の決着、そこに至るための人の必死の営みたる「詮議」系古語をあれこれと
- 114)1262●次は、詮議を尽くして裁断して実務処理に奔走した挙げ句の果てに、「どうしようもない」という無力感に辿り着く古語のあれこれ
- 115)1273●事態運営に積極的に関わったり、挫折して訳が分からなくなったりしたその後に来るのは当然「じっと動かない」系古語
- 116)1286●「じっと動かない」系の次は、その種の非行動状態の維持に必要な「忍耐」に関する古語あれこれ
- 117)1291●ひたすら動かず耐えているだけ、というんじゃやってられんのが人の心、ということで、次に来るのは「発散」系古語群
- 118)1297●こちらからあちらへの外向的方向性を持つ「やる」の次は、逆にあちらからこちらへの引き寄せ系の「おこす」
- 119)1299●思いを他者に寄せたり他者から寄せてもらおうとしたりの営みの次は、それが徒労に帰した人が往々にして陥る「破壊」系古語たち
- 120)1303●外界との対応が不調の時、最悪の「破壊」の前段階で人がまず陥る「屈託・沈鬱」系古語の世界に、ひとまず戻っておきましょう
- 121)1317●「破壊」・「沈鬱」で気が滅入った後は、それら負の波状攻撃への特効薬、「珍奇なるものへの興味・関心」の古語をどうぞ
- 122)1330●「興味・関心」の次に来るのは、「価値判断」系古語の数々を、ほめ／けなし、織り交ぜてどうぞ御覧あれ
- 123)1386●「価値判断」系古語オンパレードの次は、それらの判断を可能にする「思ふ」にまつわる古語たち
- 124)1394●次は、人が「思ふ」助けになる「書物」・「学問」そして「学識」にまつわるアカデミックな古語のあれこれ
- 125)1401●数多の古語学習の最後は、身に付けた「学識」を誇りたがる愚かなる人間の行状を表わす古語で締めましょう；御自戒めされたし
- ☆▼☆ ↓ **試験直前の受験生必見！ 本書の白眉【接続語】リスト** ↓ ☆▼☆
- 126)1406●これより先は、文法上の要注目語句、及び、単に語と語が連らなる「連語」というより、「接続語」と呼ぶべき有機的連携語群の数々
- ↓↓では、いざ本編(1500古語 in 126意味別集団)の言葉の旅路へ↓↓

●五十音からいっても人の情からも、「あ・い」がなければ始まらない、ということで、まずは「愛・情」関連の古語から

- 1- **〈B〉あいぎやう【愛敬】**《元は「慈悲の心」を意味する仏教語が、外面的特性の語義に転じたもの》[名] (1) 〈(仏教語) 他者を敬い、尊ぶ気持ち〉慈愛。 (2) 〈(外見上の) 他者を魅了する愛らしさ〉魅力。 (3) 〈(性格・行動面で) 相手の立場を考慮すること〉配慮。
- 2- **〈A〉なさけ【情け】**《「為す」+「気」の転との説もあるが、語源は定かではない。対人間の「心遣い」、男女間の「恋愛感情」、自然・人情など非個人的対象に感情移入できる感性「機微」や、その種の物事が醸し出す独特な雰囲気「情趣」など、対象の性質に応じた様々な語義を持つ》[名] (1) 〈相手の立場を考え、その人にとって良かれと思う心情。(血縁関係の者に対しては用いない)〉心遣い。 (2) 〈(男女間の) 相手を大事に思う感情〉愛情。 (3) 〈自然や人間的感情を理解する心。また、自然や人間の営みが醸し出す独特の雰囲気〉風雅。人情。情趣。 (4) 〈(漢文訓読調の脈絡で) 非生物や植物にはない、生き物ならでは心の動き〉感情。
- 3- **〈A〉なさけなし【情け無し】**《現代語の「なさけない」と同じ「嘆かわしい」の語義もあるが、古語では「人間的な心が籠もっていない」及び「醸し出される独自の雰囲気といったものがない」の語義の方が重要》[形ク] (1) 〈人間ならばあって当然の心が籠もっていない〉薄情だ。 (2) 〈(自然や人の営みから) 醸し出される独特な雰囲気が感じられない〉情趣がない。 (3) 〈(相手が薄情だ、対象に情趣がないなどの理由から) 嘆きや落胆を誘うさま〉嘆かわしい。興醒めだ。
- 4- **〈C〉なさけおくる【情け後る】**《男女間の恋愛感情であれ、自然の景物への感動であれ、「情趣を解する心に欠ける」という否定的な意を表わす。「おくる」は「後る」で、現代語でいう「遅れている／劣る」の意。これを「送る」と解すれば「相手に情をかける」などと正反対の誤解に陥るので要注意》[自ラ下二] 〈情趣を解する心に欠ける〉情に乏しい。
- 5- **〈A〉しのぶ【忍ぶ】【慕ぶ・偲ぶ・賞ぶ】**《「忍ぶ」と「慕ぶ・偲ぶ・賞ぶ」は語源的には別語。「堪え忍ぶ」及び「秘密裏に行なう」の語義には「忍ぶ」の漢字を宛て、「慕う」及び「賞美する」の「しのぶ」(中古以降の語で、上代には「しのぶ」と清音)の宛字は「慕ぶ・偲ぶ・賞ぶ」である》[他バ上二][他バ四] **【忍ぶ】**(1) 〈感情を抑制して表情や行動に出さないようにする〉堪え忍ぶ。 (2) 〈人目に付かぬよう隠したり、密かに行動する〉秘密裏に事を運ぶ。隠蔽する。 **【慕ぶ・偲ぶ・賞ぶ】**(3) 〈(主に、近辺にいない人のことを) 心の中で恋しく思う〉思慕する。 (4) 〈(目で見て) 素晴らしいと感じる〉賞美する。

- 6- 〈B〉けさう【懸想】《漢語「懸想」の撥音「ん」の無表記形。平安中期までは「ん」文字が存在しなかったため、撥音無表記語も「ん」付きで読む(例:「あめり」は「あんめり)」というのが通例だが、この「懸想」の読み方は「ケンウ」のまま。サ変動詞には「懸想す／懸想ず」と清濁双方の形がある》[名・他サ変]〈(異性に対し)恋情を抱くこと〉恋慕。
- 7- 〈B〉むつまじ【睦まし】《近世以降「むつまじ」と濁音化して現代に至る。動詞形は「睦ぶ」。「身内のような態度で慣れ親しんでいる」が原義で、単なる友人関係よりも濃密な(一歩間違えると馴れ合い・甘えにつながる)親密さを意味する。目上から目下にも用い、人間以外の対象にも用いる》[形シク] (1)〈(友人・男女関係・主人から使用人へなど、血縁関係がない相手に対し、まるで肉親のように)親しくしている〉親密だ。(2)〈(人、あるいは無生物に対し)心が自然と吸い寄せられていく感じがする〉慕わしい。
- 8- 〈B〉むつぶ【睦ぶ】《元来は「身内のような態度で慣れ親しんだ振舞いをする」の意。その対象が、(血縁関係のない)夫や妻に、やがて極めて親しい者どうしにと拡大し、「仲良くする」の意になった。その語源学的事情から、類義語「慣る・馴る」よりも親近感の度合いが濃密な語》[自バ上二]〈(非血縁者と) (まるで肉親のように)親しく付き合う〉親しく交わる。
- 9- 〈A〉ねんごろ【懇】《「根」+「如・若」(似た状態)＝「草木の根が絡み合って土中に一緒にいるのと同様」が原義。宛字「懇」が「墾」(大地を耕し田畑とする)に近いのはこの来歴ゆえ。肯定的には「親密」(近世以前は肉体関係を含意しない)・「熱心」、否定的には「やり過ぎ」を意味する》[形動ナリ] (1)〈心を込めて何かをするさま〉熱心だ。(2)〈(人と人とが)お互いに親しみ合っているさま。(愛情は意味しても、肉体的な関係は含意しない)〉親密だ。(3)〈(貶して)妥当と感じられる程度を越えているさま〉度を超している。
- 10- 〈C〉なつく【懐く】《対象に深く執着する意の「なづ」を根底に持ち、形容詞「なつかし」の元となった動詞で、現代語では自動詞の「慣れ親しむ」の意だけが残るが、古語では「慣れ親しませる」(現代語では「なつかせる」)の意の他動詞としても用いる》[自カ四]〈(人・物に)愛着を抱き、離れ難く感じる〉馴染む。〔他カ下二〕〈(人・物に)自分への愛着を抱かせ、離れ難く感じさせる〉馴染ませる。

- 11- <A>なつかし【懐かし】《動詞「懐く」の形容詞化。「泥む」(行き悩む・執着する)／「なづさふ」(水面に漂う／親しげに纏わり付く)／「灘」(潮流のため航行困難な場所)に共通する「一箇所への停留感」を根に持ち、「愛しさ」・「好感」・「懐旧の情」を理由に「ずっと傍に居たい」意を表わす》[形シク] (1) <(人が)対象を愛しく思い、常にその対象と共にありたいと願う>離したくない。(2) <(対象が)人の好感を誘い、近しくありたい、もっと触れていたいという気持ちにさせる>心惹かれる。(3) <(中世以降)昔の事を思い出して、心引かれる>昔懐かしい。
- 12- なづむ【泥む】《物理的「進行困難」／心理的「離れ難い」の意の「なづ」に由来し、泥や水に足を取られ「進むのに難儀する」が原義。物理／心理中間の語義に「(病気・困難を前に)思い悩む」がある。近世以降は「一事にいつまでも執着する」という心理的語義が優勢となる》[自マ四] (1) <(物理的に) (ぬかるんでいたり水流があつたりして) 思うように進めない>行き悩む。(2) <(物理的、または心理的に) 良くない体調や状況を前にして苦しむ>難儀する。(3) <(否定的に) 一つの事柄に心を深く悩ませる>こだわる。
- 13- <C>なづさふ【なづさふ】《物理的に「進行困難・停滞」／心理的に「去り難い・愛着」を意味する「なづ」に由来する語。水草が揺れ動きつつどこにも行けぬさまの「水面に浮かび漂う」や、小さな子供が「まつわりついて離れない」、愛着をもって人と「慣れ親しむ」といった語義を持つ》[自ハ四] (1) <(水草などが) 水の表面に浮かび漂う。また、水中に浸る>水に漂う。(2) <(小さな子供などが) 相手を慕って身体的接触を図る。また、(環境・心理面で) 極めて近い関係を持つ>まつわりつく。慣れ親しむ。
- 14- <A>なる【慣る・馴る】【萎る・衰る】《「平す・均す・馴らす」や「習ふ」と同根語で、反復的接触により凸凹状態を取り違和感なく(時に、緊張感なく)すんなり入り込む状態となる意。「習熟する」・「慣れ親しむ／馴れ馴れしくなる」は「ならふ」の類義語。「萎る・衰る」だと「経年変化」(よれよれ・使い古し)の意になる》[自ラ下二]【慣る・馴る】(1) <(物事に関し) 経験を重ねることで、違和感が消失して行く。また、完成度が高まったり、余裕ができたりする>慣れる。熟成する。(2) <(人・物事に対し) 幾度も接するうちに、敵対感情や疎遠な感じが消えて行く。また、親近感が増しすぎて、緊張感や遠慮がなくなる>慣れ親しむ。馴れ馴れしくなる。【萎る・衰る】(3) <(着物や道具について) 長く使ううちに、使用者にぴったり適合するようになる。また、経年変化で摩滅・劣化する>馴染む。使い古す。

- 15- <A>ならふ【慣らふ・馴らふ】【習ふ】《「平す・均す・馴らす」と同根の「慣る・馴る」に反復の「ふ」を付けた語で、対象への反復的接触により凹凸なき円滑な関係を作り出すのが原義。他動詞「学習する」、自動詞「模倣する」は現代語と同様。自動詞用法としては他に「慣れ親しむ」・「経験を積んで慣れる」の語義をも持つ》〔自ハ四〕【慣らふ・馴らふ】(1) <(物事に関し)経験を重ねることで、違和感が消失して行く>習慣となる。(2) <(人・物事に対し)幾度も接するうちに、敵対感情や疎遠な感じが消えて行く>慣れ親しむ。(3) <(自らの行動を)既存の事柄を手本として行なう>模倣する。〔他ハ四〕【習ふ】<意図的に何かを身に付ける。また、身に付けるための反復的・体系的努力をする>学ぶ。
- 16- ならひ【慣らひ・習ひ】《動詞「ならふ」の名詞化。「習慣」・「風習」の語義は現代語「(世間の)習い」の中にそのまま残り、「学習」の意は「習い事」の語形の中にその名残を留める》〔名〕(1) <反復的経験によって違和感が消失し、自然的・反射的にそうなること>習慣。(2) <過去から連綿と引き継がれた世間一般の物事の処理の仕方。また、経験則的に見てそうなることの多い事態>風習。世の常。(3) <意志的・継続的に何かを身に付けること。また、そのための努力や、それによって学び取るべき内容>学習(内容)。
- 17- <C>おもなる【面馴る】《「面」(顔)を何度も見合わせるうちに「馴る(=違和感・緊張感が消失する)」が原義で、「見慣れて、馴染む」という好意的意味にも、「遠慮を忘れ、馴れ馴れしくなる」という否定的意味にもなる》〔自ラ下二〕(1) <(幾度も見るうちに)緊張が解ける。親しみが沸いてくる>見慣れる。馴染む。(2) <(同じものに何度も触れるうちに)当初の初々しい感覚を失い、然るべき敬意や緊張感を伴って対象に接することがなくなる>馴れ馴れしくなる。
- 18- <C>みなる【見馴る・見慣る】《現代語と全く同じ「見慣れる」の語義と、繰り返し接触・経験することで「慣れ親しむ」の語義とがある。後者の語義では、同じく視覚的習熟を意味する「見付く」と同義語》〔自ラ下二〕(1) <(同じものを繰り返し見ること)で未知の感覚や新鮮味が薄れる>見慣れる。(2) <(何度も経験や接触を重ねることで)次第に親密度が増す>馴染む。
- 19- <C>みつく【見付く】《「つく」の意に応じて意味が二分され、他動詞だと「見付ける」(目に“付く”)、自動詞では「慣れ親しむ」(愛“着”を感じる)の意を表わす》〔自カ四〕<(何度も経験や接触を重ねることで)次第に親密度が増す>馴染む。〔他カ下二〕<(隠れていたものや、見たことのないものを)初めて目にする>見つける。

-20- 〈C〉いひつく【言ひ付く】《密着・習慣系：「(男女が)親しげに言葉を交わし親密になる」・「(特定の呼び名・物事を)口にする習慣がある」／委託系：「挨拶・依頼をする」・「事態処理・第三者への仲介などを期待・命令する」・「(本人不在の場で)告げ口する」へと語義が二分化する》〔自カ四〕(1)〈(男女間で)親しげな言葉を交わして仲良くなる〉求愛する。親密な関係になる。(2)〈(人に)挨拶・頼み事などを言う。(特に恋愛を含意しない)〉言葉をかける。〔他カ下二〕(1)〈(人に) (事態の処理や第三者への伝言などを)期待、または、命令する〉託する。言い付ける。(2)〈(良からぬ事柄について) (本人の知らない場面で)第三者に告げる〉告げ口する。(3)〈(特定の呼び名・物事などを)口にするのが習慣になっている〉言い慣れる。呼び習わす。

-21- 〈C〉こころづく【心付く】《「心」の表わす意味に応じて、お堅い「思慮分別が付く年齢になる」の意になったり、性的に「異性を意識する年齢になる」・「(特定の相手に、自分が)好意を寄せる」といった恋愛系の語義や、「(特定対象に)注意力を注ぐ」という集中系の語義になるので、文脈に注意する必要がある》〔自カ四〕(1)〈(年齢が増して)物事を合理的に判断する能力が備わる。また、異性を性的に意識するようになる〉分別が付く。色気付く。(2)〈(特定の対象に)思考・注意が向く〉思い付く。気付く。(3)〈(特定の人・物に)好意的な感情を持つ〉気に入る。〔他カ下二〕(1)〈(特定の対象に)思考・注意を向かせる〉気付かせる。(2)〈(特定の人・物に)好意的な感情を持つ〉心を寄せる。

-22- 〈A〉こころづきなし【心付き無し】《「(特定の対象に)注意力を注ぐ」及び「(特定の相手に自分が)好意を寄せる」の意を表わす動詞「心付く」に、「無し」を付けて、「興味・関心を引かれない」(つまらない)、「好意的に見ることができない」(気に食わない)の意を表わした形容詞》〔形ク〕(1)〈(特定の対象が)自分の興味・関心を引かないさま〉心引かれない。(2)〈(特定の対象に対し)心情的に好意を抱けないさま〉気に入らない。

●「愛着」が生じたら、次なる必然の過程は、「結合・結婚・縁故」等々、人と人とを結び付ける古語の数々

- 23- つく【付く・着く・著く・就く・即く】《自動詞(四段活用)・他動詞(下二段活用)として二桁にも上る多数の語義を有する他、他動詞の四段活用形(「備える」・「名付ける」)もあり、下二段形の補助動詞(「常に…し慣れる」)的機能もある。「和歌の下の句を付ける」は、文芸常識として、目立たないが重要な語義》[自カ四] (1) <(二つ以上のものが)一つのもののように密接に接触・接合する>くつつく。(2) <(汚れ・色・傷跡など)本来そこにはなかった外来的な何か^{よご}が加わる>付着する。色付く。傷付く。(3) <(空間的に)ある場所に到達する。ある物に接近する>到着する。近付く。(4) <(立っていた姿勢から)ある場所に腰を下ろして落ち着く>着席する。(5) <(地位・役職・係などを)自らの身に引き受ける>就任^{しゅうにん}する。(6) <(人・物に対し) (賛同・心服・信頼して)行動を共にする>いつも一緒である。(7) <(人・物に対し)心情・興味・関心を引かれる>心引かれる。関心を持つ。(8) <(今までなかった何らかの感情が)新たに生じる>感覚が芽生える。(9) <(自然現象として)火がつく>着火する。(10) <(特性や能力が)その人のものとして定着する>身に付く。(11) <(多く否定の表現で用いて) (人・物に)しっかりと調和する>似合う。(12) <(他事よりも優先して)ある物事に関わり合う>従事する。(13) <(霊的なものが)乗り移る>取り憑^つく。(14) <(「につきて」の形で) (人・物に)関連する>…に関して。[他カ下二] (1) <(二つ以上のものを)一つのもののように密接に接触・接合させる>くつつける。(2) <(汚れ・色・傷跡など)本来そこにはなかった外来的な何かを加える>付着させる。色付ける。傷付ける。(3) <(空間的に)ある場所に到達させる。ある物に接近させる>到着させる。近付ける。(4) <(地位・役職・係などを)ある者の身に引き受けさせる>就任^{しゅうにん}させる。(5) <(人を信頼して)事態を処置してくれるものと期待する。また、(第三者に)誰かへの取り次ぎを頼む>託^{たく}す。言付ける。(6) <(人・物に対し) (賛同・心服・信頼して)行動を共にさせる>いつも一緒にいさせる。(7) <(第三者に命じて)人の後を追跡調査させる>尾行^{びこう}させる。(8) <(人・物に対し)心情・興味・関心を向ける>心引かれる。関心を持つ。(9) <(物理的に)燃焼状態にする>着火する。(10) <(衣類・装身具・調度品などを) (身体や場所に)つける。置く>身に付ける。備える。(11) <(特に、他者の詠んだ)和歌の上の句に対し、下の句を付け足す>詠^よみ添^そえる。(12) <名前を付ける>名付ける。(13) <(「につけて」の形で)関連させる>…に関して。(14) <(動詞の連用形に付いて、補助動詞的に)そうするのが常である意を表わす>いつも…している。[他カ四] (1) <(装備・才芸として)常にそこにあるようにする>身に付ける。備え付ける。(2) <(特定の文字などを)自らの名前とする>名付ける。

-24- 〈B〉むすぶ【結ぶ】【掬ぶ】《人間の両手や紐の両端など、一対をなす細長いものどうしを固く絡み合わせて離れないようにするのが原義。「絡めて繋ぐ」の意では現代語「結ぶ」と変わらないが、古語にはまた「両掌を合わせて水をすくう」の意があり、この動作には特別に「掬ぶ」の文字を当てる》〔自バ四〕【結ぶ】〈(物理的に)何らかの形状を形成する。(結露・氷結などの自然現象について言う場合が多い)〉形を成す。〔他バ四〕【結ぶ】(1) 〈(紐などの細長いものを)ほどけぬように固く絡み合わせる。また、(結び文や呪術的な手指の組合せなど)目印・象徴として絡み合わせる)結び付ける。結び目を作る。(2) 〈(材料や部品を)組み合わせて一つのものを形作る)構成する。(3) 〈(人と人が)同じ意図・目的を持って結び付く。また、志を一つにすることを誓い合う)結束する。約束する。(4) 〈(心の中に)何らかの感情を抱かせる。(多く、哀感や憂鬱について言う)〉引き起こす。【掬ぶ】(5) 〈(人が)両手の掌を合わせる。(特に、水を掬って飲む動作について言う)〉掌で水を掬う。

-25- 〈C〉むすぼほる【結ぼほる】《意図的に組み合わせる「結ぶ」に自発の「る」を付けて自然発生的自動詞とした語が「結ぼほる」(「むすぼほる」と略すこともある)。幾つもの語義を持つが、古文で多用され、しかも最も意外性がある語義は「胸中にもやもやとした気持ちが居座り、気分が晴れない」》〔自ラ下二〕(1) 〈(一つの感情が)いつも胸の中に居座って離れない。(主に、哀感・憂鬱について言う)〉もやもやとした気分になる。(2) 〈(紐などの細長いものが)固く組み合わされてほどけぬようになる)固結びになる。(3) 〈(自然現象として)露・霜・氷が発生する)結露する。霜が降りる。氷結する。(4) 〈(人が、他の人やものと)何らかの縁によって結び付く)関係者になる。

-26- 〈B〉よばふ【呼ばふ・婚ふ】《「呼ぶ」の未然形に反復性の「ふ」を付け、文字通りには「(注意を引くため)繰り返し呼ぶ」の意だが、男が愛する女の名を繰り返し呼ぶことから「求婚する」の意で用いる場合が(「妻問婚」の時代には)多い(後代には禁断の色彩を帯び、「夜這ふ」なる艶っぽい宛字も生まれた)》〔他ハ四〕(1) 〈(相手の注意をこちらに引き付けるために)繰り返し呼ぶ)何度も呼ぶ。(2) 〈(男が女に)繰り返し恋人または妻になってくれるよう求める)言い寄る。

-27- 〈A〉すむ【住む】《「生活の場として、ある場所に居着く」の意では現代語と変わらないが、古語で重要なのは「男が女の所に恋人・夫として通う」意味での「住む」。所謂「妻問婚」時代の恋愛・婚姻形態であるが、平安期の文物に於けるその出現頻度・重要度は極めて高い》〔自マ四〕(1) 〈(生活の場として)ある場所に居着く)暮らす。(2) 〈(妻問婚の形で)男が女の所に夫として通う)男が女の許を訪れる。

- 28- **〈A〉あふ【合ふ・会ふ・逢ふ・婚ふ】**《別々のものが集合する意味を多岐に亘って表わす語で、現代語同様の語義が多いが、古語で多用される要注意語義は「男と女して結ばれる」。下二段活用だと他動詞で「一つに合わせる」の意となる》[自ハ四] (1) 〈(別々のものが)一ヶ所に集まる〉集合する。 (2) 〈(異なるものどうしが)びたりとうまく合う〉調和する。 (3) 〈(偶然または約束して)人・物事に会う〉出会う。 (4) 〈(夫婦または恋人どうしとして)男と女が結ばれる〉結婚する。肉体関係を持つ。 (5) 〈(敵どうしとして)対面する〉張り合う。 (6) 〈(動詞の連用形に付いて、補助動詞的に)共に何かを行なう意を表わす〉一緒に…する。 [他ハ下二] 〈複数のものを一つにする〉合わせる。
- 29- **〈A〉あはひ【間】**《「あひあひ」の略で、物理的には「^{あいたい}相対するものどうしの形成する空間」、社会的には「人と人との関係」、抽象的には「人・物・色合いなどの取り合わせ」や「時間・場面^{めぐ}の巡り合わせ」の意を表わす》[名] (1) 〈向き合うものどうしの間の空間^{かんかく}〉間隔。 (2) 〈人と人との関係〉間柄。 (3) 〈人・物・色調などの相互^{そうご}関係〉釣り合い。 (4) 〈時間・場面^{めぐ}の巡り合わせ〉情勢。
- 30- **〈A〉あひだ【間】**《空間的に近接した物事の「^{すきま}隙間」や、一定範囲内の空間的な「距離」が原義。連続の範囲が時間的に拡大されると「期間」、対人^{げんきゆう}関係に言及すると「間柄」の意になる。「原因(…なので)」、「契機^{けいき}(…したところ)」の接続助詞用法は中世以降の漢文体でのもの》[名] (1) 〈複数のものの間の、空間的・時間的な欠落部分^{すきま あいま}〉隙間。合間。 (2) 〈ある一定範囲内の空間的・時間的連続〉区画。距離。期間。 (3) 〈対人関係における近しさ〉間柄。 [接助] (1) 〈(中世以降)原因・理由を表わす〉…なので。 (2) 〈(中世以降)ある事態に引き続き、別の事態が起こることを表わす〉…(した)ところ。
- 31- **〈C〉なからひ【仲らひ】**《人と人との関係を表わす「^{なか}仲」+「^{なか}中ら・^{なか}半ら」(半々)の漠たる距離感+「^{めぐ}合ひ」(巡り会うことで初めて成立する非血縁的人間関係) = 「仲らひ」なので、社会的関係として生じる「人との付き合い」(特に、恋愛^よ関係)が基本義で、「血族」への流用は(語源的には)誤用》[名] (1) 〈(血縁に^よ拠らぬ)人と人との付き合い。(多く、男女の仲について言う)〉付き合い。 (2) 〈(社交に^よ拠らぬ)血縁的な人間関係〉血族。

- 32- 〈B〉あはす【合はす】《四段活用動詞「合ふ」を他動詞化したもの。現代語と同じ語義が多いが、色恋の文脈での「男女を夫婦として一組にする」、歌合はせなどの競技で「別々の組として張り合わせる」、夢占いに於ける「見た夢の含む意味を読み解く」などは古語特有の語義なので要注意》〔他サ下二〕(1) 〈別々のものを一つにまとめる〉合わせる。(2) 〈状況に適合するように調整する〉釣り合わせる。(3) 〈他者の演奏や詩文に調子を合わせて自らも演奏・詩作をする。また、楽器を調音する〉調子を合わせる。調律する。(4) 〈(運命または人為で)ある事態に遭遇させる〉…に遭遇させる。(5) 〈男女を夫婦にさせる〉めあわせる。(6) 〈見た夢の内容から、吉凶を判断する〉夢占いをする。(7) 〈(歌合はせなどの競技で、参加者どうしを)対抗させて勝敗を決める〉競わせる。(8) 〈(動詞の連用形に付いて、補助動詞的に)複数のものが同時、または、相互に何かをするさまを表わす〉一緒に…する。お互い…し合う。
- 33- 〈C〉あふせ【逢ふ瀬】《「瀬」は「川の浅瀬」＝「辛うじて渡れる狭い場所」ということから「辛うじて逢うことのできる数少ない場面」の意になる。こうした場面を心待ちにするのは、恋愛関係にある男女(多くは、人目を忍ぶ仲)ということになる》〔名〕〈(人目を忍んだり、困難を乗り越えたりしながら)恋愛関係にある男女が会う機会〉逢い引き(の場面)。
- 34- 〈A〉ちぎる【契る】《誓いを込めて「堅く約束する」意を表わす。古文では「男女が変わらぬ愛を誓い合う」語義が重要。そして愛を誓い合った男女が「肉体関係を持つ／結婚する／夫婦の関係を保つ」の語義もあるが、古文は恋愛場面の詳述に乏しく、どの程度の関係かの判別は困難》〔他ラ四〕(1) 〈誓いを込めて、堅く約束する〉誓約する。(2) 〈(男女が)心変わりほししないと約束する〉変わらぬ愛を誓う。(3) 〈(男女が)愛の印として肉体的に結ばれる〉肉体関係を持つ。夫婦の関係にある。
- 35- 〈B〉きぬぎぬ【衣衣・後朝】《衣服を表わす「衣」を疊語(＝二段重ね)化した「衣衣」は、前夜に共寝をした男女が、翌朝、それぞれの衣服を着てさよならすることを表わす表記。「後朝」の表記は「事の果てた後の朝」というその語義に着目した宛字》〔名〕(1) 〈(前夜に愛し合った男女が、翌朝)それぞれの衣服を着て別れること。また、その朝〉後朝の別れ。情事の翌朝。(2) 〈(主に、愛し合っている男女や夫婦が)別れ別れになること〉離別。

- 36- 〈C〉まじらふ【交じらふ】《「交じり」+「合ふ」の略とも、「交じる」の連用形+反復を意味する接尾語「ふ」に由来するとも言われる語で、物理的に「混じり合う」の意を表わす他、多数・大人数の存在する場面に自ら分け入る＝「仲間入りする」の語義にもなる》[自ハ四] (1) 〈他の物事の中へと入り込み、区別が困難な状態になる〉混じり合う。(2) 〈(大勢いる人々の中に)自らも分け入る。(特に、宮中への出仕を意味する例が多い)〉仲間入りする。
- 37- 〈B〉すだく【集く】《「巢+抱く」に由来すると思われる語。人以外にも動物・虫が一箇所に集まる様子の形容に多用されるのは、「巢に集まる」の語感ゆえのことであろう。類義語「あつまる」は生物・無生物双方が対象。「つどふ」だと、意思を持つ人間が集合する意になる》[自カ四] (1) 〈(人・動物・虫などが)一箇所に集まる〉群がる。(2) 〈(虫などが)集まって鳴く〉鳴き騒ぐ。
- 38- 〈B〉たづき【方便】《「手」+「付き」＝「どこから手を付けるべきか」と考えれば「手段」が原義となる;が、「様子・状態」の意もあり、後者には古くは「跡状」の表記もあるのに対し、「た」＝「手」の表記例は『万葉集』時代には存在しないので、あるいは後者の方が原義か、とも言われる》[名] (1) 〈(目的を果たすための)やり方〉手段。(2) 〈(物事の)ありさま〉様子。
- 39- 〈A〉たより【便り・頼り】《「手」+「寄り」＝相手に手を伸ばしてすがりつく、が原義。「抛り所」・「縁故」・「便宜」・「機会」などは原義に忠実な依存性の語義。依頼の手段としての「手紙」の語義もそこから派生した。多少原義から外れたものとして「物どうしの取り合わせ」の語義もある》[名] (1) 〈頼みとする人や物〉抛り所。(2) 〈血縁関係のある誰か〉縁故。(3) 〈事を為す上で有利に作用する人や物〉手づる。つて。(4) 〈事を為すのに適当な時〉機会。(5) 〈こちら側の事情を相手に伝えるもの。また、伝わってくる相手側の事情〉消息。(6) 〈物と物とが相互に影響を及ぼし合って生まれる全体的な印象〉取り合わせ。

- 40- 〈C〉よせ【寄せ】《他者に対し心を寄せること＝「期待・信頼・信望」が原義。期待を寄せてよい相手ということから「後ろ盾」や「縁故」、更には歌論用語としての「縁語」の語義が派生した。「理由・いわれ」の語義は「よすが・・・拠す＋処＝^{ことよ}事寄せるべき事情」と同根語と考えればよい》[名] (1) 〈(他者を)立派なもの、信じるに足るものと考えて、心を許すこと〉^{めんどう}信望。 (2) 〈(他者に対し)面倒を見たり社会的影響力を行使して助けたりする人物〉^{うしろだて}後ろ盾。 (3) 〈血縁関係でつながっている人物〉^{えんご}縁故。 (4) 〈(ある事態を正当化する)然るべき事情〉^{しか}理由。 (5) 〈縁語。(和歌の中で、異なる複数の語句どうしが、直接にはつながらないものの、意味上の関連性を持っているために、相互に響き合っていてイメージの膨らみを演出する修辞法に於ける、意味上関連性のある複数の語句どうしのこと)〉^{えんご}縁語。
- 41- 〈C〉よそふ【寄そふ・比ふ】《対象に“寄せる”を語源とし、似たものどうしとして「関係付ける」、比較したり引き合いに出したりするために「比べる」の意を表わす》[他ハ下二] (1) 〈(対象と似たものどうしとして)相互に関係ありとする〉^{くわ}関係付ける。 (2) 〈(相対比較や例示のために)異なるものどうしを並べて比べる〉^{くら}なぞらえる。
- 42- 〈C〉よそふ【装ふ】《現代語「装い」にもある通り、「きちんと正式に衣裳を整える」や「準備する」が原義。服装を整える語義から派生した「食器に食べ物を盛り付ける」の意での「よそふ」は、いつしか「盛る」と混同され、両者を足して二で割ったかのような「よそる」の語形も生じた》[他ハ四] (1) 〈(一般的に)事に臨んできちんと物品を用意する〉^{ぶっぴん}準備する。 (2) 〈(衣服を整えて)きちんとした身なりをする〉^{みじたく}身支度をする。 (3) 〈(食べ物を)きちんと食器の上に乗せる〉よそる。
- 43- 〈A〉よすが【縁・因・便】《語源は「寄す＋処」(拠り所)で、奈良時代は「よすか」と清音。精神的・物質的に「頼るもの」(拠り所)、血縁上「頼れる身近な存在」(親類縁者)、自分のために「社会的影響力を行使してくれる存在」(つて)、目的を達成するために取り得る「手段」の語義を持つ》[名] (1) 〈(精神的・物質的に)頼ることのできるもの〉^{よりどころ}拠り所。 (2) 〈(血縁のつながりなどから)頼りにできる身近な存在〉^{えんご}縁者。 (3) 〈(自分のために)社会的影響力を行使してくれる存在〉^{てづ}手づる。 (4) 〈(目的を達成するために)取り得るやり方〉^{てづ}手段。

- 44- 〈B〉えにし【縁】《現代語同様の「縁」を、「ん・ン」の撥音表記がなかった当時は末尾の“n”音に「に」文字を宛がって「えに」と書いたが、中古には(特に和歌で)多く「えに+し+あらば」の形で強意の副助詞「し」と共に用いたので、「えにし」があたかも一語の名詞の如く錯覚された》[名]〈(何らかの因果関係を生じるような、物・人の中の)つながり〉**因縁**。
- 45- 〈B〉ゆかり【縁】《「由」(起点)+「許」(目的地)の転とも、「故」+「係り」の略ともされる。類義語「縁」が「ある結果を必ず生じる必然的原因」を表わす仏教語なのに対し、「ゆかり」は「何らかのつながり」という間接的關係や「血縁関係により生じた人と人とのつながり」を意味する語》[名] (1)〈(血縁関係によって生じた)人と人とのつながり〉**縁故**。(2)〈(直接的には明らかではないが、元をたただせば認識できるような形で)人・物どうしが何らかの形で結び付いていること〉**つながり**。
- 46- 〈C〉ぐ【具】《「一対になるもの・常に傍らに存在するもの」が原義。「常に付き添う相手」の意は四字熟語「不俱戴天」(=共に並んで天を戴くことができぬ敵対者)の「俱」の感覚、「食事の添え物」の意は「味噌汁の具」、「身の回りの日用品」の意は「道具」に絡めて理解するとよい》[名] (1)〈(人に)常に付き添う者。(貴人の)御側近くに居る者。結婚した相手。(前夫・前妻との間に生まれた)子供〉**相棒**。**従者**。**配偶者**。**連れ子**。(2)〈日常用いる身の回りの品〉**道具**。**家具**。(3)〈(料理で)主たる食材に混ぜて出す副食材〉**添え物**。**〔接尾〕**〈(衣服・器具・食品など)異なる品目が全部揃って初めて完全になる物事を数える語)・・・**揃い**。
- 47- 〈A〉ぐす【具す】《漢語「具」の持つ「随伴」の意をサ変動詞化した語で、「具備」及び「帯同・携帯」を表わす自動詞/他動詞として用いる》[自サ変] (1)〈(一揃いの品目や求められる特性を)欠けることなく有する〉**具備する**。(2)〈(人と)一緒に行く〉**同行する**。(3)〈(男女が)夫婦となって一緒に暮らす〉**連れ添う**。**〔他サ変〕** (1)〈(一揃いの品目を)欠けることなく全部集める〉**備える**。(2)〈(人を)一緒に連れて行く〉**帯同する**。(3)〈(物品を)身に付けて運ぶ〉**携帯する**。
- 48- 〈B〉つら【列・連】《「釣り」・「弦」・「連れ」と同根語で、「途切れることなく連なるもの」が原義。「連れ立つ相手」即ち「仲間・同類」に言及する例も多い。「つら」の疊語の「つらつら」は、思考や行動を「途切れることなくじゅくり」との意の副詞として現代語にもそのまま残っている》[名] (1)〈途切れることなく連なるもの〉**行列**。(2)〈(物理的に)場所を同じくする者達の集団。(分類学的に)特性を同じくする者の集団〉**仲間**。**同類**。

- 49- 〈A〉**どち【どち】**《「仲間」の意の名詞にも、「…な者どうし」の接尾語にもなる。現代風に漢字表記すれば「同士・同志」だが、「どし」の読みは後発で、元来は「どち」》〔名〕〈親しい間柄にある者達〉仲間。〔接尾〕〈(名詞に付けて)同類の意を表わす〉…同士。
- 50- 〈C〉おのがどち【己がどち】《「どち」は現代語「同士」に通ずる名詞で、接尾語として用いると「…な者どうし」を表わす。これに「自分自身」を意味する代名詞「己」+所有の格助詞「が」がついて「仲間どうし(の間で)」の意の名詞/副詞となる》〔名〕〈(世間一般と区分しての)当人どうし〉仲間同士。〔副〕〈(世間一般と区分して)自分達の間だけで、の意を表わす〉仲間内で。
- 51- 〈B〉はらから【同胞】《起源・由来を表わす「から」を内包する点で「輩」・「族」などと同系語。「同じ母親の腹から出た者どうし」=「兄弟姉妹」を表わす。その後、男系社会になり、母親は違っても父親は同じ兄弟姉妹にも拡大して用いられるようになった。非血縁者には用いない》〔名〕〈(原義的には同母の、やがて異母をも含めた)親を同じくする血縁関係にある者〉兄弟姉妹。
- 52- 〈C〉ともがら【輩】《「から」は起原・出自を表わす。「同胞」だと「同じ母親の腹から生じた者達」=「兄弟姉妹」、「族・輩」は「同じ家・屋から出た者達」=「一族」(または「連中」)で、「輩」だと、血縁関係を持たず、ただ「共に居る」という共通項で結ばれた人間集団=「仲間・同類」を意味する》〔名〕〈同じ場所や経験を共有する者達〉仲間。
- 53- 〈C〉みなひと【皆人】《特定の場面に限定して「その場に存在する全員」の意を表わす。複数形にして「皆人人」とも言う。語順が逆転した「人皆」でも同じ意を表わせるが、「人皆」の場合は、特定の場に限定されずに万人、即ち「世の中のありとあらゆる人間」の意を表わす場合もある》〔名〕〈(特定の場面に居合わせた)人物全員。(世の中の「万人」の意味ではない)〉その場の全員。

●愛着と結合でこの世は回る、ってことで、次は「よ」にまつわる古語あれこれ

- 54- **〈A〉よ【世・代】**《竹の「^よ節」(現代では「ふし」だが古語では「よ」と同音・同発想の語。成長の節目ごとに刻まれるこの「よ」を「時間的区切り」と意識して生じた語が「世・代」で、その根底にあるのは「画期」であって「区画」ではない(=時間系の語であって空間系の語ではない)》[名](1)〈(人が)生まれてから死ぬまでの間の時間・経験。または、その長さ)一生。寿命。(2)〈(仏教語)前世(生まれる前の世)・現世(この世)・来世(生まれ変わる世)の三世。または、正法・像法・末法の三つの時代区分)三世。(3)〈(歴史的に)特定の支配者(天皇や将軍など)が君臨した時代として、他の時代と区分される時代)・・・期。時代。(4)〈(社会的に)様々に移り変わる人間世界全般。また、(歴史的に)その時代特有の風潮によって他の時期とは区分される世の中)世間。時勢。(5)〈(人・物事が)今の状態とは異なる状態で存在したある特定の時)時期。(6)〈(社会的に)人が置かれた立場の軽重。(経済的に)人の暮らしの状態)境遇。貧福。(7)〈(地理・政治的に)人間が暮らす領域)世界。(8)〈(出家・隠遁した立場の人間から見て)世俗的欲望に満ちた世界、また、その世界の人々やその欲望)俗世間。世俗的欲望。(9)〈(経済学的に)生きるためにしなければならない営みや、その状態)生活。暮らし向き。(10)〈(世間から見た)社会的な評価や位置付け)世評。(11)〈(愛情の濃淡から見た)男女間の関係の緊密さ)夫婦仲。
- 55- **〈B〉よのなか【世の中】**《「世」は「竹の^よ節」と同根語で、時間的区切り目の特性が強いが、これに「中」を加えて「世の中」となると、空間的・社会的色彩が濃くなる。基本的語義は「世」も「世の中」も同じ。「世／世の中」に「男女の仲・愛情の濃淡」なる私的状况の意がある点には特に要注意》[名](1)〈(地理・政治的に)人間が暮らす領域)世界。(2)〈(社会的に)様々に移り変わる人間世界全般。(歴史的に)その時代特有の風潮によって他の時期とは区分される世の中)世間。時勢。(3)〈(歴史的に)特定の支配者(天皇や将軍など)が君臨した時代として、他の時代と区分される時代)・・・期。時代。(4)〈(世間から見た)社会的な評価や位置付け)世評。(5)〈(社会的に)人が置かれた立場の軽重。(経済的に)人の暮らしの状態)境遇。貧福。(6)〈(愛情の濃淡から見た)男女間の関係の緊密さ)夫婦仲。(7)〈(人間生活を取り巻く)外界の様相。(特に、自然現象としての天候を問題にする場合が多い)自然界。天候。(8)〈(「世の中の」や「世の中に」の形で)希少性や程度の甚だしさを強調する語)とてつもない。

- 56- <C>あめがした【天が下】《漢語の「天下」を和訳したもので、「神・仏・この世のものではない何者かの領域」としての天界との対比に於いて捉えた「地上世界」と、政治的区分としての「この世界・国家・国政」の意味に分かれる》[名] (1) <(神の領域としての天界と対比しての)地上の世界(の全て)>この世。 (2) <(政治的区分としての)この世界。また、その世界を統治すること>天下。国家。国政。
- 57- <A>すくせ【宿世】《字義通りには「この世に生まれる前の先の世」即ち「前世」を指すが、平安時代の文物では「因果応報の理により、前世での行ないに応じて確定している現世に於ける人の運命」即ち「宿命・因縁」の語義で使われる場合が多い》[名] (1) <(人が、この世に生まれるよりも)前に存在していた世>前世。 (2) <(前世での行ないによって決定している)この世での運命>宿命。
- 58- <C>よをすつ【世を捨つ】《この「世」は「俗世間・世俗的欲求」の意で、それを捨て去るのだから「出家・隠遁する」の意となる。「世を・・・」の形で同じ意を表わす類例には、「世を・・・背く・遁る・離る」などがある》[連語]《よ[名]+を[格助]+すつ[他タ下二]》<(俗世間を離れて)仏教の修行に専念する>出家する。
- 59- <C>よをそむく【世を背く】《「世」=「俗世間・世俗的欲求」、「背く」=「背中を向ける」なので、両方合わせて「俗世を捨てて宗教生活に入る=出家・隠遁する」の意の連語となる。現代的類推から「世間の目を欺く」とか「腐った世の中に背を向けて自分だけの世界に入る」などと誤解せぬように》[連語]《よ[名]+を[格助]+そむく[他カ下二]》<(俗世間を離れて)仏教の修行に専念する>出家する。
- 60- <C>よづく【世付く】《「世」を「世間」と解釈すれば「世間慣れする」・「世間並みになる」・「俗っぽくなる」などの常識的語義となり、「世」=「男女の仲」の線で解すると「異性を意識する・色気付く・性的に成熟する・オトナになる」という艶っぽい語義になる。「世慣る・世馴る」と同義語》[自カ四] (1) <(人が成長して)社会の現実や人との付き合いに慣れる>世間慣れする。 (2) <(人が成長して)男女の情を理解するようになる>色気付く。 (3) <(人が低い身分から身を起こして)社会の一般的水準に到達する>世間並みになる。 (4) <(昔は純粹・神聖だった人や物が)俗世間の影響を受けて残念な姿に変わってしまう>通俗的になる。

- 61- 〈C〉よなる【世慣る・世馴る】《現代日本語にも残る「世慣れる」は、「長年の経験から、多く、小狡い形で、他者を出し抜く悪知恵が付く」の語義だが、古語の「世」には「男女の仲」の意もあるので、「異性を意識する・色気付く・性的に成熟する・オトナになる」の語義にもなる。同義語に「世付く」がある》〔自ラ下二〕(1) 〈(人が成長して)社会の現実や人との付き合いに慣れる)世間慣れする。(2) 〈(人が成長して)男女の情を理解するようになる)色気付く。

●「世」つながりで今度は「夜」

- 62- 〈C〉よさり【夜さり】《この「さり」は「去り」ではなく、人の思惑に無関係に恒常的に来ては去る性質の時間的推移に言及して「夜になる頃」または「今夜」の意を表わす。「夜」を、「節」・「枝」・「世」・「四」・「予」・「余」などの同音異義語と区分するのに好適な形として「夕さり」の類推から生じた語》〔名〕〈昼の時間帯が終わり、夜の時間帯になる頃。また、その日の夜)夜になる頃。今夜。
- 63- 〈C〉よは【夜半】《「宵」が、母音交替形の「夕」に化けたのと同様、「よひ→よは」に転じた語か、と言われる。語頭以外での「ハ」行音は「ワ」行転呼するので、読み方は「ヨワ」といかににも柔和になるため、主として平安・鎌倉期の和歌の中で「夜半・夜中」の雅語として用いられた》〔名〕〈日が暮れて真っ暗な時間帯。(主に、平安・鎌倉期の和歌の中で使われる雅語)夜。
- 64- 〈C〉よがれ【夜離れ】《「夜離れ」よりむしろ、語義的には「世枯れ」とも感じられる語。男が女のもとへ通う古典時代の妻問婚の恋愛・結婚形態に於いて「男が夜に女を訪問しなくなる」(=愛情が冷める)意で、学校で教えるには些か艶っぽい、が、文物の主題に恋愛が多い古文では重要語》〔名〕〈(夫婦・恋人の関係の)男が女のもとへ通わなくなる事)男女間の仲が冷えること。

●夜が明ければ次は「朝」

- 65- 〈A〉あかつき【暁】《上代語「あかとき＝明か時＝夜が朝日に赤く染まる頃」が、中古以降「あかつき」となった。早朝の時間帯全般を指す語で、これが更に前半＝「曙(和歌では「東雲」)」／後半＝「朝朗け」に分かれる》〔名〕〈夜中から朝に移行する時間帯)早暁。
- 66- 〈A〉あけぼの【曙・明ぼの】《「明け」＋「ほの」(＝夜が灰かに赤く染まる頃)で、「あかつき」の前半の時間帯(和歌用語では「東雲」)。後半の時間帯は「朝朗け」》〔名〕〈夜が白み始める早い時間帯)早朝。